

【第十回】「漢字(五体)の基本と書き方」
— 隷書② 特徴とその書き方 —

常葉大学教授
本誌編集委員 平形 精逸

◇はじめに
先月号では、隷書の歴史と書道史上の代表的な古典を取り上げて鑑賞しました。今月は隷書の特徴や書き方をさらに細かくとらえた後、生活の中にもみられる例を取り上げます。

■隷書の特徴

- 隷書を楷書と比較すると、次の特徴があげられます。
- ① 横画は水平、縦画は垂直に構える。
 - ② 字形は横長(扁平)となる。
 - ③ 起筆はすべて逆筆・藏鋒とする。
 - ④ 送筆部は中鋒または側筆となる。
 - ⑤ 収筆は筆を軽く止めたり、主要画には波磔をつける(ただし多くても一字一波)。

■主要画の書き方

- 〈横画〉(図1及び次ページ図2参照)
○右の方から(逆筆)穂先を巻きこむようにして入れ(藏鋒)(右回りでも左回りでもよい)、折り返す。

○穂先が線の中心を通るように筆を水平に運ぶが(中鋒)、側筆になることもある。



図1 隷書の書き方

- 波磔のつかない収筆では押さえなくて止める。
○波磔はいったん筆を止めてから、右下に力を加え、弧をえがくようにしてゆっくり右斜め上に払い出す。

〈縦画〉(図1参照、以下同じ)

- 起筆は横画同様に逆筆、藏鋒にし、垂直に運筆して収筆では押さえずに止める。

〈左払い〉

- 軽く逆筆・藏鋒で入った後に筆圧を徐々に加え、筆を逆押しして止める。

〈右払い〉

- 左払いのように徐々に筆圧を加えて筆を開き、横画の波磔のように右斜め上に払い出す。

〈転折〉

- 横画の終わりでいったん筆を離し、あらためて縦画を書く(楷書のように続けない)。

■隷変

篆書から隷書への変容を隷変といいます。隷変については矢野千載氏の優れた研究(「隷変における造形美の推移について」——青山杉雨

記念賞第二回受賞——)があります。左表は「隷書における筆画の基本的な変容要素」を十三の視点からまとめた資料の一部です。同氏は、さらに特殊な字例として、「横画への統一」や「斜画の強調」なども指摘しています。

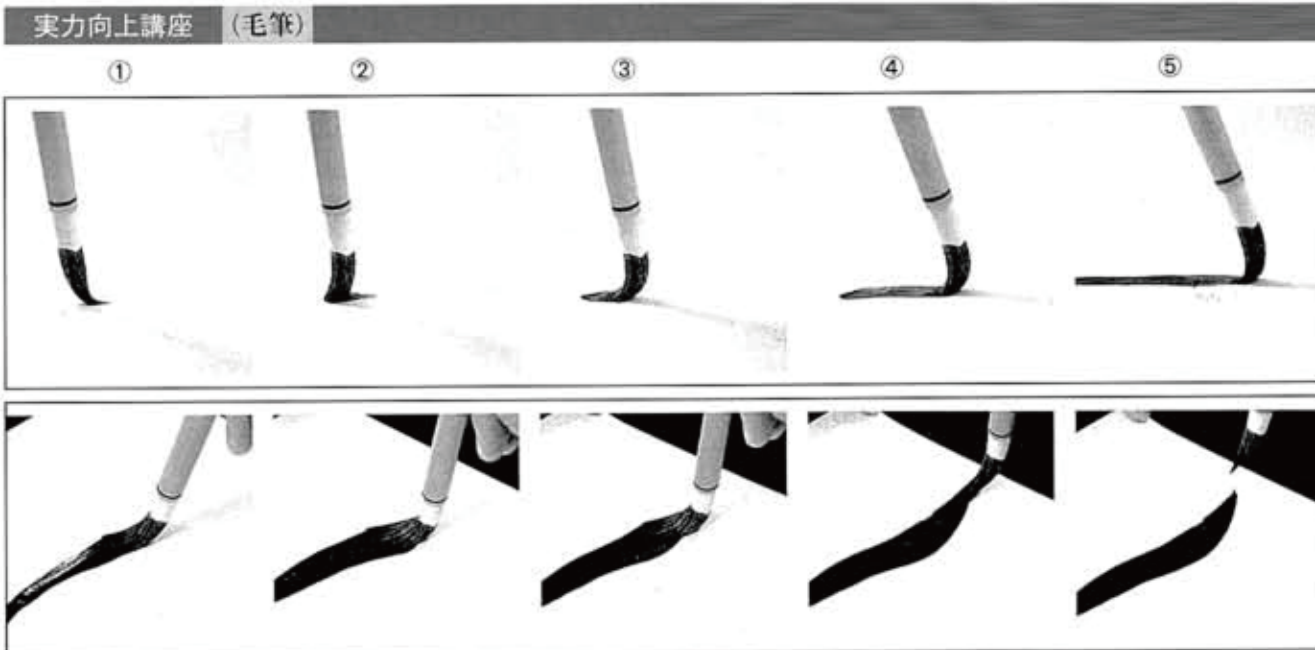
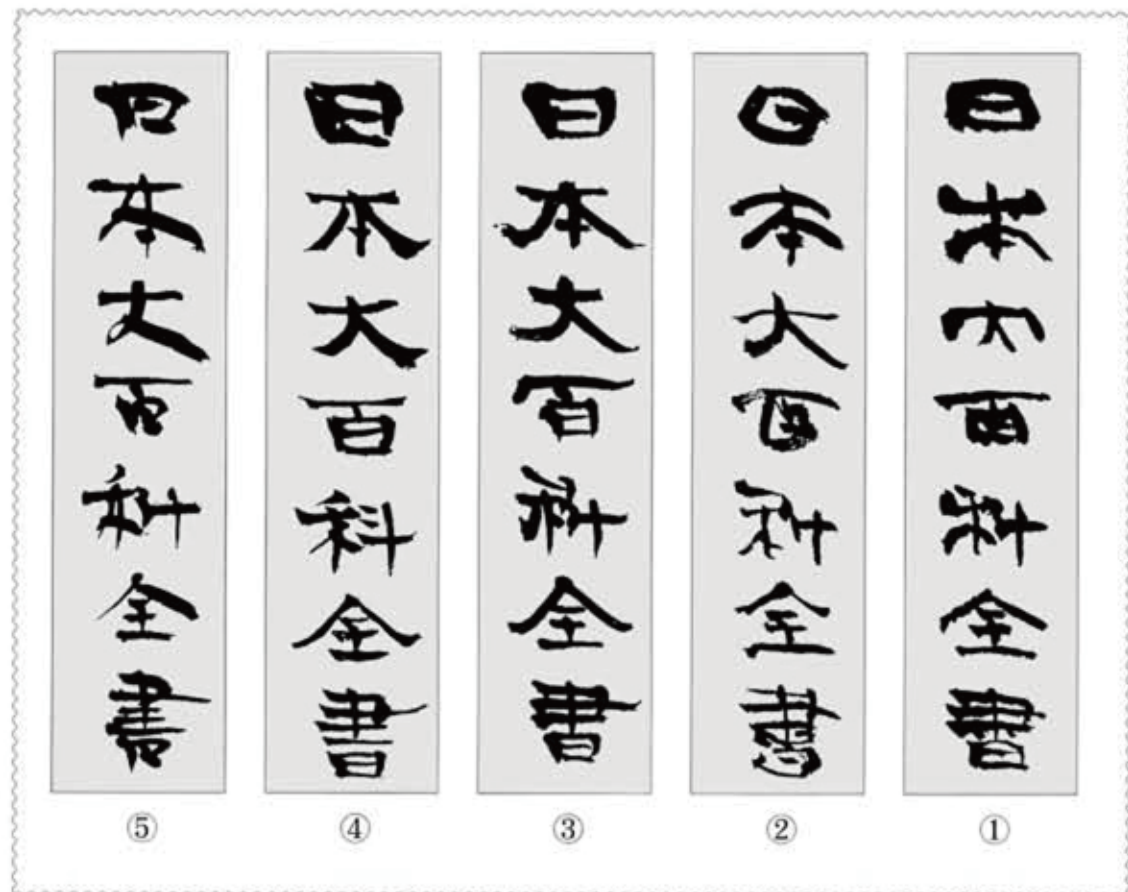


図2 横画(止めと波磔)の書き方 高等学校教科書「書道I」(教育図書)より

変容要素	説文篆文	秦 隸	前漢 古隸	八分(漢簡)	八分(漢碑類)
直線化	出	出	出	出	出
波磔の出現	人	人	人	人	人
左払い化	反	反	反	反	反
横画の形成	承	承	承	承	承
点化	然	然	然	然	然
短縮化	卯	卯	卯	卯	卯
伸長化	新	新	新	新	新
省略	夏	夏	夏	夏	夏
増加	手	手	手	手	手
結合	申	申	申	申	申
分離	身	身	身	身	身
異体化	數	數	數	數	數
屈折化	元	元	元	元	元



■生活の中の手

青山杉雨先生（文化勲章受章者。一九二一～一九九三）による書作品の四回目、今回は隷

書五点が並んでいます。①は波線がなく、②は帛書に見られる波線が芽生えたところのもの、④⑤からは隷書の形がややくずれた独特の趣きを感じられます。

新聞賣讀

「読売新聞」

印南溪龍書（昭和21年、41歳）

- ① 前漢時代の古隷書
- ② 前漢時代の木簡の隷書
- ③ 後漢時代の八分
- ④ 魏時代の隷書
- ⑤ 魏時代の木簡の隷書



説文篆文

念誌とし、異なる形にならざるを得なかった根拠を示しています。



カット・橋本綾乃

■後漢時代の代表的な隷書

作品名	制作年	古	典	図	版	解	説
石門頌	148					褒斜溪谷の岩壁に刻された摩崖碑。素朴、飄逸な書で、ゆるやかなリズムで大、野趣に富んでいる。	
乙瑛碑	153					「史晨碑・礼器碑」と合わせて孔廟三碑という。字形整い沈着のため習いやすい。	
礼器碑	156					孔廟三碑の中で神品と評される。細線を重厚な波線が引きしめ理知的である。	
曹全碑	185					県令であった曹全の頌徳碑。秀潤典麗と評され、字面完好で習いやすい。	
張遷碑	186					蕩陰令であった張遷の徳を追慕した文。野武士的で古拙な趣きがある。	

■清時代の代表的な隷書

金農（一六八七～一七六三）・相鶴経軸隷書（部分）



揚州八怪の中心的存在。側筆で横画を太く、縦画を鋭く細く表現する「漆書」を確立した。

伊秉綬（一七五四～一八二五）・五言聯（部分）

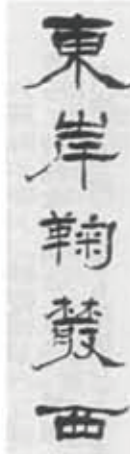


氣宇壮大な特異な書風による隷書。筆圧の強弱は少ないが線の息は長い。



伊秉綬像

楊岷（一八一九～一八九六）・隸書七言聯（部分）

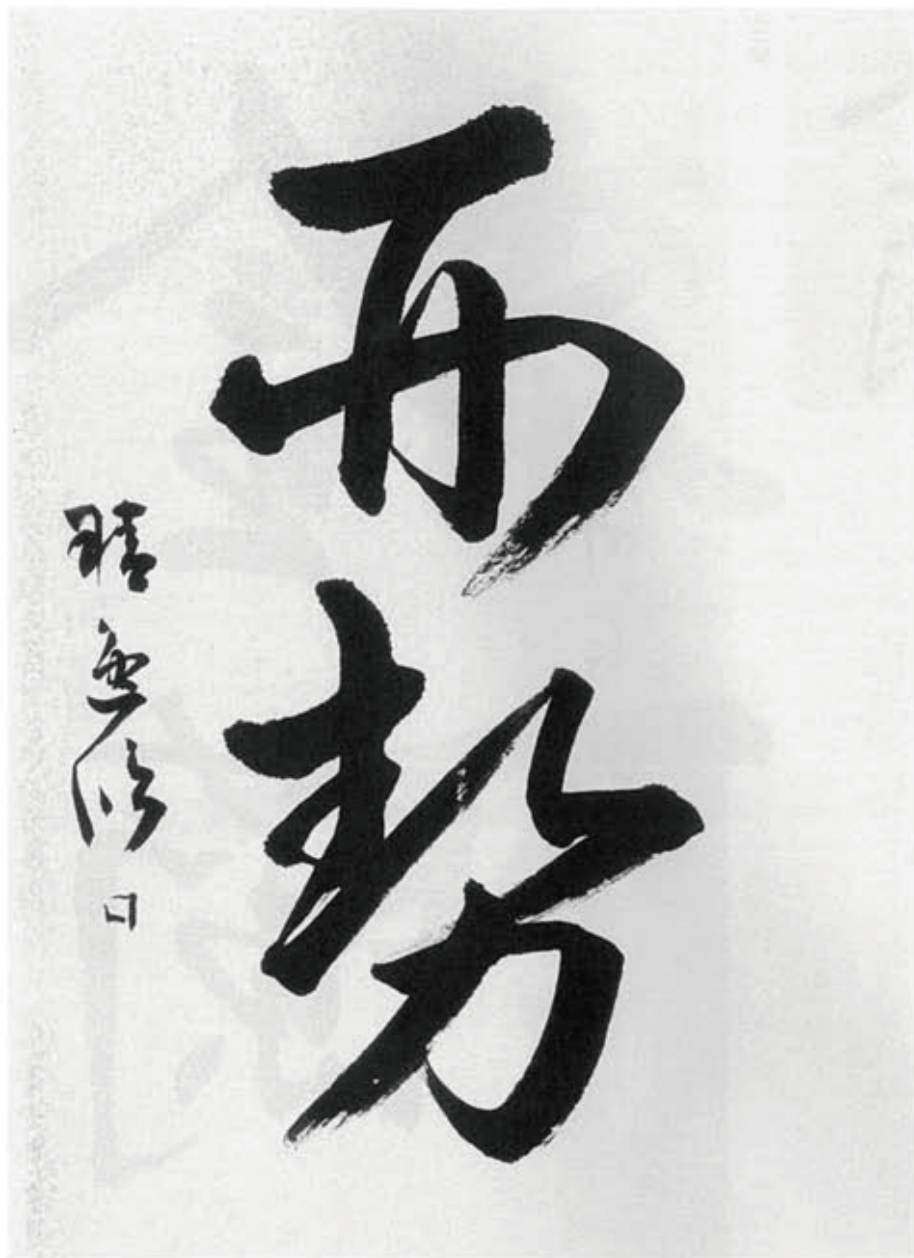


「礼器碑」の趣きを生かし、細い線に変化をつけた重厚な隷書を得意とした。

高・大・一般 漢字（草書）

平形 精逸

十七帖（王羲之書）①



且つ山川の形勢も乃ち（爾り。）



今回から三回にわたり、「十七帖」を取り上げます。

「十七帖」は、書聖といわれる王羲之が蜀の周撫にあてた尺牘（手紙）二十九通を集めた単帖です。書き出しが「十七日」で始まることからこの名がついています。二十九通それぞれにも帖名がつけられています。手紙という一度きりの率意の書に、羲之の力が端的に発揮されており、古来、草書の第一の規範として尊重されています。

〈今月のワンポイント〉

「十七帖」の刻本には「三井本」と「上野本」が有名ですが、今回取り上げた「三井本」は「断筆」と呼ばれる用筆がかなり見受けられます。「断筆」とは、方向を変える部分で、少しずらしてから次の方向へ運筆することです。

〈学習上の留意点〉

「形」：偏の筆順が変化し、一画目横画から折り返すようにして縦画へ続きます。下部の横画は低めに位置し、旁の「さんづくり」に続く箇所には「断筆」が見られます。「さんづくり」は、左払いに一画化され、その上部は空いています。

「勢」：略化と連続が見られます。「力」は、上部の中心よりやや右にずらして安定感を高めます。

